

# 鷺巢敦哉氏と『台湾総督府警察沿革誌』の編纂について（九訂稿）

—日本統治下台湾警察史の一齣—

令和 4（2022）年 7 月 12 日（火）現在

（補正経緯）

初稿：平成 17（2005）年 3 月 15 日作成  
（HP 初載）：改訂稿：平成 19（2007）年 8 月 6 日作成  
再訂稿：平成 20（2008）年 2 月 18 日作成  
三訂稿：平成 20（2008）年 4 月 14 日作成  
四訂稿：平成 21（2009）年 1 月 14 日作成  
五訂稿：平成 23（2011）年 6 月 11 日（土）作成  
六訂稿：平成 26（2014）年 9 月 9 日（火）作成  
七訂稿：平成 26（2014）年 12 月 1 日（月）作成  
八訂稿：令和 4（2022）年 4 月 1 日（金）作成  
九訂稿：令和 4（2022）年 7 月 12 日（火）作成

〔作成経緯〕

・本稿は、最初平成 17（2005）年 3 月 25 日付き某紙<sup>1</sup>に掲載し、その後『鷺巢敦哉とその時代（続々輯）—日本統治下台湾警察史雑纂第六輯—』（平成 18（2006）年 1 月 1 日刊）に収録したもの（初稿）に、改訂を加えつつあるものである。

（改訂稿：平成 19（2007）年 8 月 6 日作成）

・鷺巢敦哉氏の逝去に関する『台湾警察時報』記載事項を追加するとともに、誤植等を一、二修正した。なお、鷺巢敦哉氏の個々の著作については、本 HP 所載の別稿「鷺巢敦哉氏著作目録抄—日本統治下台湾警察史の一齣—」等をも参照。

（再訂稿：平成 20（2008）年 2 月 18 日作成）

・鷺巢敦哉氏の逝去に関する『台湾警察時報』記載事項を追加するとともに、誤植等を一、二修正した。

（追加：再訂稿：平成 20（2008）年 2 月 18 日作成）

・許世楷氏関係の記事を更に追加するとともに、誤植等を一、二修正した。

（三訂稿：平成 20 年 4 月 14 日作成）

・秦郁彦編『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』（南方軍政史研究フォーラム、平成 10 年 12 月 5 日刊）関連の件を追加するとともに、誤植等を一、二修正した。

（四訂稿：平成 21（2009）年 1 月 14 日作成）

---

<sup>1</sup> 「鷺巢敦哉と『台湾総督府警察沿革誌』の編纂—日本統治下台湾警察史の一齣—（第 317 回律令研究会発表要旨）」『國學院大學日本文化研究所報』第 243 号（平成 17 年 3 月 25 日刊）（平成 26 年 12 月 1 日追加）

・一部を補訂するとともに、各種他サイトとリンクさせた。

(五訂稿: 平成 23 (2011) 年 6 月 11 日作成、多士来浜日)

・『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書 (続) ・雑誌所収著作補遺 (続) ・索引』(緑蔭書房、平成 26 年 7 月 31 日刊) 刊行に伴い、一部補正した。

(六訂稿: 平成 26 (2014) 年 9 月 9 日作成)

・「2 鷺巣敦哉の履歴」について追加した他、一部補正した。

(七訂稿: 平成 26 (2014) 年 12 月 1 日作成)

・レイアウトを全面変更するとともに、(参考 2) として「村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて—(改訂稿)—日本統治下台湾警察史の一齣—」を付した上で、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯)—』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録した。

(八訂稿: 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日作成)

・一部補正した。

(九訂稿: 令和 4 (2022) 年 7 月 12 日作成)

## 〔目 次〕

1 はじめに	3
2 鷺巣敦哉の履歴	4
3 鷺巣敦哉の個人著作	7
4 台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』の編纂	8
(1) 鷺巣の『沿革誌』への思い	8
(2) 『沿革誌』の全体構想と刊行状況	8
(3) 『沿革誌』編纂の中断	9
5 『沿革誌』Ⅲ (第二編領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—)の編纂過程	9
6 おわりに	11
(附記)	12
(参考 1) 鷺巣敦哉関係文献追加	12
(参考 2) 「村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて—(改訂稿)—日本統治下台湾警察史の一齣—」	13

## 1 はじめに

周知のように、台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』（全六冊、昭和8～17年刊、以下「本書」又は『沿革誌』。東京・緑蔭書房、台北・南天書局各復刻本は内五冊にI～Vを付す。）は、日本統治下台湾史研究についての「基本資料中の基本史料」（マ、若林正丈氏（1949～）の言<sup>2</sup>）といわれ、その編者は、同局嘱託であった鷺巣敦哉氏（わしすあつや、1896～1942。以下「鷺巣」という。）である。しかるに、本書が有名な割りには、鷺巣の生涯とか、「台湾社会運動史」の別名を持ち全六冊中最も重要な『第二編領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』（昭和14年7月28日刊。『沿革誌』Ⅲ。）の編纂経緯については、長年詳しいことはわからないままであった。

1988（昭和63）年1月の李登輝（1923～2020）政権成立後、台湾では台湾史研究が漸く進展し始め、これに伴い、従来殆ど手がつけられていなかった日本統治期の雑誌類も、本格的検討の時期に入った。そうした中、中島利郎氏（1947～）は、『台湾時報』、『台湾警察協会雑誌』、『台湾警察時報』、『台法月報』及び『台湾教育』等といった当時のメジャー雑誌の目録を作成、刊行した<sup>3</sup>。このうち、警察雑誌については、『台湾警察協会雑誌』、『台湾警察時報』総目録』（林原文子と共編、緑蔭書房、平成10年8月25日刊。以下『目録』。）として刊行されたが、これで初めて、日本統治期台湾警察の様々な分野の活動が判明するに至った。鷺巣については、当時「（台湾）警察界切つての文章家である」（中山侑（すすむ、1907～1959）の言<sup>4</sup>）と評され、かなりの個人著作が刊行されていたことは判明していたが、『目録』によって、両雑誌への寄稿状況も明らかになり、大量の個別論稿が存在することがわかった。当該時期台湾史研究のためにも、この機会に、その個人著作集を刊行することが望まれ、中島氏等は、まず、『鷺巣敦哉著作集』全五巻（緑蔭書房、平成12（2000）年12月10日刊。以下『著作集』。）を出し、その後、それに漏れたものを集め、（財）交流協会の助成<sup>5</sup>を得て、同14（2002）年1月31日に、別巻を追加刊行した<sup>6</sup>。その過程で、鷺巣の御息女の古川ミドリ氏（1928～）とも連絡がとれ、貴重な御示教を仰ぐことができた。

この結果、鷺巣のパーソナルヒストリー及び『沿革誌』（第二編領台以後の治安状況中

<sup>2</sup> 『鷺巣敦哉著作集』（全五巻、緑蔭書房、平成12年12月10日刊）刊行パンフレット参照。

<sup>3</sup> 中島利郎編『『台湾時報』総目録』（緑蔭書房、平成9年2月15日刊）、中島利郎・宋宜静（1969～）『『台法月報』総目録』（緑蔭書房、平成11年9月25日刊）、中島利郎・宋子紘（?～）『台湾教育総目録・著者索引第124—497号（1912—1943）』（台北・南天書局、2001年10月刊）、中島利郎編『『台湾地方行政』総目・人名索引〔試行本〕』（緑蔭書房、平成21年9月30日刊、

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakajima001.pdf>）（最後のもののみ平成23年6月11日追加）

<sup>4</sup> 中山侑『台湾警察時報』第270号（昭和13年5月刊）62頁（『著作集』別巻337頁）

<sup>5</sup> 交流協会日台交流センター「出版助成一覧」：

[http://www.koryu.or.jp/center/ez3\\_contents.nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/4902b7b07ad90a144925744e000739d3/\\$FILE/syuppanjyosei.pdf](http://www.koryu.or.jp/center/ez3_contents.nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/4902b7b07ad90a144925744e000739d3/$FILE/syuppanjyosei.pdf)（平成23年6月11日追加）

<sup>6</sup> その後、『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書（続）・雑誌所収著作補遺（続）・索引』（緑蔭書房、平成26年7月31日刊）が刊行された。（平成26年9月9日追加）

卷一台湾社会運動史一)の編纂経緯についても、ほぼ明らかになった。以下では、この状況について、一瞥しておくこととする。

## 2 鷺巣敦哉の履歴

鷺巣については、国内では夙に戴國輝氏<sup>7</sup>(1931～2001)が昭和61(1986)年に私的研究会で報告する<sup>8</sup>も、公表されたものはなく、1995(平成7)年6月に台北・南天書局より復刻された『沿革誌』Vに、呉密察氏(1956～)が解題でその履歴を戦後初めて書いたのを嚆矢とする<sup>9</sup>が、『著作集』編纂過程で、詳しいことが判明した。詳細は、『著作集』V「鷺巣敦哉小伝覚書」<sup>10</sup>に誌したが、一、二言及しておくこと、以下のとおりである。なお、下記「(参考)鷺巣敦哉略年譜(改訂稿)」参照。「なお」以下平成26年12月1日補正)・明治29(1896)年3月31日出生、本籍は鹿児島県。幼少期台湾の役所勤務の父と基隆、嘉義で過ごす。父の死で帰省。大正6(1917)年1月、再び渡台。台湾総督府警察官及司獄官練習所<sup>11</sup>(以下「練習所」。)乙科を修了。南投庁巡查、同庁警部補、台中州警部補(地方制度改正による。)及び同州警部として南投庁、台中州、台中警察署に勤務。この間に、練習所甲科(第25回)、内務省警察講習所(現在の警察大学校、第13期)修了。・その後、台中州員林郡警察課長に擬せられるも成らず、昭和4(1929)年5月、練習所教官(判任)に転任、台北市に移り、八甲町の練習所構内官舎に居住。翌5年1月27日、霧社事件が発生し、現地に出動。同6年9月中旬病氣となり、自宅療養。12月初め、昭和六年度行政整理との関係で辞職を求められ、翌7(1932)年1月16日、練習所教官を最

<sup>7</sup> <http://www18.big.jp/~yabukis/2002/taiguohu.htm> (平成23年6月11日追加)

<sup>8</sup> 戴國輝氏は、昭和61(1986)年4月開催の「台湾近現代史研究会」例会において、「台湾総督府警察沿革誌の周辺―編者鷺巣敦哉を中心に―」と題する報告をしている(『台湾近現代史研究』第6号(緑蔭書房、昭和63年10月10日刊)233頁)。

<sup>9</sup> 呉密察「台湾総督府警察沿革誌解題」『台湾総督府警察沿革誌』V(台北・南天書局復刻版、1995(平成7年)年6月刊)。その後、呉密察監修、遠流台湾館編著『台湾史小事典』(遠流出版公司、2000年刊)中に、「鷺巣敦哉」の項目が設けられたが、これは、『鷺巣敦哉著作集』刊行前のものであり、現在では訂正を要する。同書の邦訳として、横澤泰夫編訳『台湾史小事典』(福岡・中国書店、平成19年2月11日刊)220、221頁参照。(一部分平成20年2月21日修正追加)

<sup>10</sup> 「鷺巣敦哉小伝覚書」『鷺巣敦哉著作集』V 解説21～43頁、なお、当該記述については、『鷺巣敦哉著作集』別巻で補正してある。⇒(下記平成26年9月9日追加)その後刊行の前掲『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書(続)・雑誌所収著作補遺(続)・索引』(緑蔭書房、平成26年7月31日刊)279～282頁所収の「【附録2】鷺巣敦哉略年譜(改訂稿)」参照。

<sup>11</sup> 練習所の写真につき、下記アドレス参照。昭和20(1945)年5月31日台北大空襲後の米軍に抛る同年6月17日撮影航空写真は特に貴重である。(平成23年6月11日追加)

[http://webcache.googleusercontent.com:80/search?q=cache:0hsJ\\_Fe8-BoJ:linchunsheng.blogspot.com/2011/02/blog-post\\_17.html+%E5%8F%B0%E5%8C%97%E5%BB%B3%E5%A4%A7%E5%8A%A0%E8%9A%8B%E5%A0%A1%E5%8F%A4%E4%BA%AD%E5%BA%84&cd=7&hl=zh-TW&ct=clnk&gl=tw&source=www.google.com.tw](http://webcache.googleusercontent.com:80/search?q=cache:0hsJ_Fe8-BoJ:linchunsheng.blogspot.com/2011/02/blog-post_17.html+%E5%8F%B0%E5%8C%97%E5%BB%B3%E5%A4%A7%E5%8A%A0%E8%9A%8B%E5%A0%A1%E5%8F%A4%E4%BA%AD%E5%BA%84&cd=7&hl=zh-TW&ct=clnk&gl=tw&source=www.google.com.tw)

⇒(下記平成26年9月9日追加)本航空写真については、前掲『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書(続)・雑誌所収著作補遺(続)・索引』口絵⑩及び同解説307頁参照。

後に退官。

・同年 6 月、台湾総督府警察沿革誌編纂事務を委嘱され、当初は(財)台湾警察協会に、12 月督府警務局嘱託に所属が変わり、以後、同局警務課に所属。

・昭和 8 (1933) 年から同 17 (1942) 年にかけて、公的には『沿革誌』I～V、『台湾警察遺芳録』、『沿革誌』別編の『詔勅・令旨・諭告・訓達類纂』、私的にも多数の著書を刊行。

・昭和 16 (1942) 年 1 月以降、病気のため静養、台大病院に入院、手術。翌 17 (1942) 年 3 月 29 日、台北市東門町 202 番地の自宅で逝去 (46 歳)<sup>12</sup>。同 20 (1945) 年 8 月 15 日、終戦。

(参考)

鷺巣敦哉略年譜 (改訂稿) (平成 26 年 12 月 1 日追加)

『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書 (続)・雑誌所収著作補遺 (続)・索引』(緑蔭書房、平成 26 年 7 月 31 日刊) 解説原稿作成後の平成 25 (2013) 年 12 月 24 日思いがけずさる識者より鷺巣敦哉の台湾警察在職中特に練習所教官に転出するまでの履歴について貴重な示教を受けた。同氏の御厚情に深甚の謝意を表するものである。その一部を基に急ぎ整理したのが「鷺巣敦哉略年譜 (改訂稿)」である。既刊『著作集』解説 (I:1～12 頁、V:21～43 頁) で言及したことと若干の齟齬があるが、これらでもってほぼ同氏の履歴が確認できる。解説本文に組み込むべきところ、その余裕がないことから、敢えて同書【附録 2】として収載したが、これを下記に再録しておくこととする。

明治 29 (1896) 年 3 月 28 日 原籍地生まれ (『著作集』V 解説 25 頁では「3 月 31 日」と記載したがこのあたり不明。「3 月 28 日」が正しいのか。)

原籍: 鹿児島県日置郡下伊集院村苗代 (ママ、苗代川か) 百二十三番地

大正 6 (1917) 年 1 月 8 日 巡査練習生を命ず

大正 6 (1917) 年 1 月 15 日 台湾総督府巡査を命ず

大正 6 (1917) 年 4 月 30 日 台湾総督府警察官及司獄官練習所警察官部乙科を修了す

大正 6 (1917) 年 4 月 30 日 南投庁巡査を命ず、月俸十二円を給す

大正 6 (1917) 年 5 月 2 日 草鞋墩 (後の草屯) 支庁勤務を命ず

大正 6 (1917) 年 5 月 10 日 大正 6 年台湾総督府に於て施行したる文官普通試験に合格せり

大正 6 (1917) 年 8 月 28 日 霧社支庁勤務を命ず

大正 8 (1919) 年 3 月 8 日 任南投庁警部補、給月俸二十四円、霧社支庁勤務を命ず、蕃地勤務中加俸月俸十分の七を給す

大正 8 (1919) 年 3 月 17 日 霧社支庁第七監視区監督を命ず

---

<sup>12</sup> 『台湾警察時報』第 318 号 (昭和 17 年 5 月 15 日刊) 掲載の「任免異動」中「職員死亡」欄 (107 頁) に、鷺巣の死亡記事あり。また、これを受けて、同誌第 320 号 (昭和 17 年 7 月 20 日刊) 掲載の佐藤生名義の連載稿「白日夢」中「星空」(48 頁) に鷺巣の追悼記事あり。(平成 20 年 2 月 18 日追加)

大正 8 (1919) 年 8 月 22 日 集集支庁勤務を命ず、集集支庁第一監視区監督を命ず  
大正 9 (1920) 年 3 月 31 日 給月俸二十八円  
大正 9 (1920) 年 8 月 18 日 判任官俸給令改正給月俸五十三円  
大正 9 (1920) 年 8 月 31 日 官制改正廃官  
大正 9 (1920) 年 9 月 1 日 辞令書を用いず台中州警部補に任ぜられ月俸五十三円を給せらる、台中州警務部衛生課勤務を命ず  
大正 9 (1920) 年 12 月 6 日 同衛生課衛生係を命ず  
大正 10 (1921) 年 3 月 22 日 甲科練習生として入所の為警察官及司獄官練習所へ派遣を命ず  
大正 11 (1922) 年 3 月 25 日 台中州警務部警務課勤務を命ず  
大正 11 (1922) 年 3 月 29 日 警察官及司獄官練習所警察官部甲科を修了す  
大正 11 (1922) 年 4 月 12 日 台中州警務部衛生課衛生課兼務を命ず  
大正 12 (1923) 年 3 月 31 日 給月俸六十二円  
大正 12 (1923) 年 4 月 7 日 大甲郡勤務を命ず、大甲郡第五監視区監督を命ず  
大正 13 (1924) 年 1 月 17 日 大甲郡第四監視区監督兼務を命ず(同年 1 月 25 日免兼務)、大甲郡警察課大甲分室兼務を命ず  
大正 13 (1924) 年 3 月 20 日 員林郡勤務を命ず、員林郡第四監視区監督を命ず  
大正 13 (1924) 年 12 月 6 日 任台中州警部、給月俸六十四円、東勢郡勤務を命ず、内勤を命ず、戸口主務を命ず、阿片主務等を命ず、  
大正 13 (1924) 年 12 月 31 日 語学試験規程により本島語乙種十等に合格、乙種本島語通訳兼掌を命ず、十等月手当を給す  
大正 14 (1925) 年 8 月 5 日 台中州警務部衛生課勤務を命ず、衛生係長を命ず、  
大正 15 (1926) 年 3 月 31 日 台中警察署勤務を命ず、内勤を命ず、戸口主務を命ず、警務係主任を命ず、行政係主任を命ず、阿片主務等を命ず  
大正 15 (1926) 年 9 月 30 日 給月俸六十八円  
昭和 2 (1927) 年 2 月 28 日 語学試験規程により福建語乙種九等に合格、自今通訳兼掌九等月手当を給す  
昭和 2 (1927) 年 6 月 30 日 給月俸七十円  
昭和 2 (1927) 年 9 月 20 日 台中警察署戸口主務、警務係主任及行政係主任、阿片主務等を免ず  
昭和 2 (1927) 年 9 月 20 日 警察講習所へ入所の為上京を命ず、警察講習所へ入所中加俸十分の三及日額旅費二円五十銭を給す、警察講習所へ入所中本島語通訳兼掌月手当を給せず  
昭和 3 (1928) 年 6 月 30 日 給月俸七十三円  
昭和 3 (1928) 年 7 月 11 日 帰任の序を以て新潟岐阜鹿児島の新三県へ出張を命ず  
昭和 3 (1928) 年 7 月 28 日 警察講習所本科の課程を履修したることを証す  
昭和 3 (1928) 年 8 月 11 日 台中警察署警務係主任兼行政係主任を命ず、同署戸口主務、阿片主務等を命ず  
昭和 3 (1928) 年 12 月 5 日 任台中州通訳兼台中州警部、給月俸七十三円、同州警務部

警務課勤務を命ず、警務部警務課規画係長を命ず

昭和4(1929)年3月31日 給六級俸(月俸七十五円)

昭和4(1929)年5月18日 任台湾総督府警察官及司獄官練習所教官(兼台北州警部)、  
給六級俸

昭和?(193?)年??月??日 給五級俸(月俸八十五円)

昭和7(1932)年1月16日 給三級俸(月俸百十五円)、依願免本官(行政整理に際し)

昭和7(1932)年6月??日 台湾警察協会書記(『台湾総督府警察沿革誌』編纂事務に従事)

昭和7(1932)年9月??日 台湾総督府警務局囑託(同)

昭和17(1942)年3月29日 台北市東門町の自宅で逝去

### 3 鷺巣敦哉の個人著作

鷺巣は、昭和7(1932)年1月退官後、個人の著書を10冊前後(未判明のものあり。)刊行しているが、主要なものは、次のとおりである<sup>13</sup>。なお、『著作集』(※)の収録巻数を付した。

①『警察生活の打明け物語』(自己出版、昭和9年2月15日初版刊)(※『著作集』I)

15

②『台湾警察四十年史話』(自己出版、昭和13年4月28日初版刊)(※『著作集』II。以下『四十年史話』。)

③『台湾保甲皇民化読本』(自己出版、昭和16年6月20日初版刊。)(※『著作集』III(但し第三版)。以下『保甲読本』。)

④『台湾統治回顧談(台湾の領有と民心の変化)』(遺著、台湾警察協会、昭和18年9月20日刊)<sup>16</sup>(※『著作集』IV)

⑤※『著作集』<sup>17</sup>V(『雑誌所収著作』)(緑蔭書房、平成12年12月10日刊)

⑥※『著作集』別巻(『警察試験叢書・雑誌所収著作補遺・索引』)(緑蔭書房、平成14年1月31日刊)等<sup>18</sup>。

<sup>13</sup> 本HP別稿「鷺巣敦哉氏著作目録抄—日本統治下台湾警察史の一齣—」参照。

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu002.pdf>) (平成23年6月11日追加)

<sup>14</sup> (<http://www.worldcat.org/identities/lccn-nr2001-40065>) (平成23年6月11日追加)

<sup>15</sup> 同書は現在では台湾・国立公共資訊図書館「数位典藏服務網」(日文舊籍)で閲覧できる。(平成26年12月1日追加)

([http://das.ntl.gov.tw/sp.asp?xdurl=sp.asp&spurl=xdcn/query\\_for\\_front/search/search\\_ad.jsp?dtd\\_id=000075&ctNode=344](http://das.ntl.gov.tw/sp.asp?xdurl=sp.asp&spurl=xdcn/query_for_front/search/search_ad.jsp?dtd_id=000075&ctNode=344))

([http://das.ntl.gov.tw/sp.asp?xdurl=BrowseTopic/gipControler.asp&uid=topic\\_result\\_detail&cur\\_do\\_index=1&xml\\_id=0001803062&ctNode=213&dtdname=+%3A+%E6%97%A5%E6%96%87%E8%88%8A%E7%B1%8D](http://das.ntl.gov.tw/sp.asp?xdurl=BrowseTopic/gipControler.asp&uid=topic_result_detail&cur_do_index=1&xml_id=0001803062&ctNode=213&dtdname=+%3A+%E6%97%A5%E6%96%87%E8%88%8A%E7%B1%8D))

<sup>16</sup> (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisukaiko.pdf>) (平成23年6月11日追加)

<sup>17</sup> (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisuzasshikiko.pdf>) (平成23年6月11日追加)

<sup>18</sup> (この時点での)鷺巣の著作補遺として、差し当たり『鷺巣敦哉とその時代—日本統治下台湾警察史雑纂第四輯—〔特別収録〕:『鷺巣敦哉著作集』補遺続輯(第一輯)』(自己出版、平成15(2003)年8月1日刊)及び『鷺巣敦哉とその時代(続々輯)—日本統治下台湾警察史雑纂第六輯—〔特別収録1〕:『鷺巣敦哉著作集』補遺続輯(第二輯)・〔特別収録2〕:戴炎輝博士略年譜・著作目録(三訂稿)』(自己出版、平成18(2006)年1月1日刊)各参照。

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/higashikata001.pdf>) (アドレスのみ平成23年6月11日追

⑦※『著作集』補遺（『警察試験叢書（続）・雑誌所収著作補遺（続）・索引』）（緑蔭書房、平成26年7月31日刊）（平成26年9月9日追加）

#### 4 台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』の編纂<sup>19</sup>

##### (1) 鷺巢の『沿革誌』への思い

『沿革誌』編纂の一般的なことは、『沿革誌』V208頁以下の「付警察沿革誌に関する事項」中に詳しいが、『警察生活の打明け物語』（『著作集』I）中の「警察史の編纂に従事して」（401頁以下）では、『沿革誌』の編纂の経緯及び『沿革誌』I編纂に関する個人的苦心を述べた後、「（中略）先人苦心の跡を記録して、台湾の存在と共に、永遠に遺しておくことも、到底、属僚等の仕事とは比較にならぬやうな気もする。全編を拵へあげたとき、台湾警察の存在と共に、未来永劫に遺さるゝ功績となろうことを思へば、目前少々の誘惑に、紊りに、心を動かすべきものでないかも知れぬ。……知己を後世に求める……これが唯一の鞭撻でもあり、愉快でもある」（407頁以下）と総括している。

まさに、『著作集』I406頁小見出しにある「『知己を後世に』=之が心境」、これこそ『沿革誌』を貫く鷺巢の思いであろう。

##### (2) 『沿革誌』の全体構想と刊行状況

『沿革誌』は、昭和8（1933）年より同17（1942）年にかけて、台湾総督府警務局編として、次のように刊行された。

- ① 『第一編警察機関の構成』（昭和8年12月15日刊）（『沿革誌』I。）
- ② 『第二編領台以後の治安状況上巻』（昭和13年3月31日刊）（『沿革誌』II。）
- ③ 『第二編領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』（昭和14年7月28日刊）（『沿革誌』III。）
- ④ 『第二編領台以後の治安状況下巻—司法警察及犯罪即決の変遷史（刑事警察制度の変革）—』（昭和17年3月29日刊）（『沿革誌』IV。）
- ⑤ 『第三編警務事績編』（昭和9年12月17日刊）（『沿革誌』V。）
- ⑥ 別編『詔勅・令旨・諭告・訓達類纂』（昭和16年3月31日刊）（『沿革誌』別篇。なお、台湾総督官房文書課『諭告訓達類聚』（昭和19年3月29日刊）はその続巻になる。）

この他、⑦『台湾警察遺芳録』（台湾総督府警務局編、昭和15年4月1日刊。『遺芳録』。）があるが、これも、『沿革誌』の「外篇」という性格を有する（『著作集』V367頁）。

ただ、『沿革誌』の当初構想は、これより大きなものであり、例えば、『沿革誌』I「凡

---

加)

⇒上記のものは、その後、『鷺巢敦哉著作集 補遺 警察試験叢書（続）・雑誌所収著作補遺（続）・索引』（緑蔭書房、平成26年7月31日刊）に収録された。（平成26年9月9日追加）

<sup>19</sup> <<http://tkb.nmth.gov.tw/Doth/Article.aspx?3993>>（平成23年6月11日追加）



例」、『四十年史話』「自序」等は、その全体構想を示しているのので、御参照を乞いたい。

### (3) 『沿革誌』編纂の中断

鷺巢は、昭和 14 (1939) 年 7 月 28 日に最重要の『沿革誌』Ⅲを刊行した後、同 15 年 3 月刊の『台湾警察時報』(以下『時報』) 第 292 号所掲の「道聴塗説 役所の記録と仕事」(『著作集』V 462 頁) 中でも、『沿革誌』編纂について述べているが、次いで、『台湾保甲皇民化読本』(『著作集』Ⅲ。以下『保甲読本』) について書かれた「私の職域奉公台湾保甲皇民化読本執筆の趣旨」(『時報』第 304 号(昭和 16 年 3 月刊) 60 頁以下、『著作集』V 480 頁以下) 中では、更に次のように言っている。

「(中略) 他人は知らず、自分だけは、今の仕事(註: 『沿革誌』編纂を指す。)こそは天が与へた恰好の任務、あれも一時これも一時の官吏の仕事の生命に比して、知己を百歳の後に俟つ底の自惚れ(註: 『著作集』I 406 頁以下参照。)を以て、全精力を注ぎ込んでやって来た。資料の蒐集も漸く目鼻がついたので、之れからは一年二冊位は悠々纏め得る自信もつき、今年(註: 昭和 16 年)は迎春の挨拶にも大に文筆奉公の覚悟を吹聴したものである。

処で、十年に亙り蒐集した無慮六七十万枚に達する資料で、たつた三百部しか印刷しない役所の沿革誌ばかり拵へてゐるのでは勿体ない。役所のものとして書けば、正確なる事実の叙述を第一要件とするが、之が延いて出来上つたものは無味乾燥、読者の親しみ難い憾みがある。そこで考へついたので、沿革誌の外篇とも云ふべき通俗的読物(註: 『四十年史話』、『保甲読本』等を指す。)の書流しである。(以下略)」(60 頁、V 480 頁)

しかし、その後入院、手術し、更には逝去するに至り、『沿革誌』は、ついに、その編纂が中断することになる。なお、上記引用文にある「知己を百歳の後に俟つ」云々の記述は、先(4(1))に引用した「『知己を後世に』=之が心境」と同じく、鷺巢が『沿革誌』編纂において根底に有していた自負であろう。

## 5 『沿革誌』Ⅲ(第二編領台以後の治安状況中巻一台湾社会運動史一)の編纂過程

『沿革誌』の編纂過程及び方法については、従来『沿革誌』I「凡例」、『沿革誌』V 208 頁以下の「付警察沿革誌に関する事項」及び『四十年史話』「自序」等の記述があったが、『著作集』の刊行により、更に詳しく知ることができるようになった。この結果、『沿革誌』Ⅲの編纂経緯についても、漸く判明するに至った。

『沿革誌』Ⅲは、戦後台湾史研究家の間で長く「幻の書」(許世楷氏(1934~)等の言<sup>20)</sup>ともいわれる程入手が難しく、『沿革誌』中で最も重要視されてきたものである<sup>21)</sup>が、

<sup>20</sup> 許世楷「解説」台湾史料保存会『日本統治下の民族運動(上巻)武力抵抗篇』(風林書房、昭和 44 年 10 月 1 日刊) 3 頁、同「解説」台湾史料保存会『日本統治下の民族運動(下巻)政治運動篇』(風林

その編纂については、従来、同書凡例の記述を除き、判然としていなかった。すなわち、「巻頭凡例」には、「属村上克夫、小林松三郎輯録、警察沿革誌編纂事務嘱託鷺巢敦哉修校正其他を担任せり。」とあるが、従来、この二人の属の果たした役割については、久しく不明のままであった<sup>22</sup>。

しかるに、「道聴塗説・警察沿革誌第二編本を作る苦しみと楽しみ」（『時報』第 270 号、昭和 13 年 5 月刊。『著作集』V 365 頁以下）及び「警察界道聴塗説・栄転せし小林光政氏・本島社会運動史」（『時報』282 号、昭和 14 年 5 月刊。『著作集』V 414 頁以下）の両稿が『著作集』V に復刻されたことにより、その編纂過程がほぼ判明した。

まず、前者によれば、当初『沿革誌』Ⅲは、同Ⅱ（昭和 13 年 3 月 31 日刊）と同時刊行の予定であったが、「保安課の二人々に異義があつて」、Ⅲの上梓は遅れたとのことである。

次いで、後者は、その理由等を次のように述べている。すなわち、鷺巢が、昭和 12（1937）年に、当時「本島高等警察史上最も貴重な文献」である領台以後大正の末頃迄の台湾思想運動の経緯を誌した『治安状況』（督府警務局保安課編纂。かつて昭和初めに当時督府保安課長であった小林光政<sup>23</sup>（1892～1962、大正 6 年内務省入省）が編纂させたという。）その他に基づき、昭和 7（1932）年迄の概況を未定稿にして、その訂正を担当課の督府警務局保安課に依頼したところ、「保安課では別箇の見解もあつて、作るなら出来るだけ詳しいものを編纂し、編纂が済んだら、従来山積せる資料を焼棄すると云ふ意気込の許に、主として村上属が輯録の衝に当られ、漸く昨夏（註：昭和 13 年）私の手許に廻されましたので、」印刷に付したという。而して、その後、「過去に於ける台湾思想運動の凡有場面の委細を尽してありますが、これ丈けのものをデツチ上げた（ママ）、村上克夫君の努力は将に不朽のものでないかと思はれます。私もこゝまで引ずつたと云ふては語弊もありますが、警察沿革誌編纂の一つの目的を達したやうにさへ思はれます。各課の属官が主管の事務について、之れ位の研究はあらまほしきことではありませんか。」と村上属の功績を讃え、その後で、「今同氏は厦門に出張中、小林〔松三郎〕属と私とで校正を担当して印刷を進めている始末でありますが、」として、小林属の役割の一部をも明らかにしている。

これらよりすると、『沿革誌』Ⅲの刊行には、鷺巢の他に、督府保安課属村上克夫（よしお、1899～1974）、小林松三郎（しょうざぶろう、1896～1980 頃）の尽瘁が極めて大

---

書房、昭和 44 年 7 月 1 日刊）2、3 頁、同「幻の書「台湾総督府警察沿革史〈ママ〉」の復刻に当って」『台湾』第 3 卷第 6 号（台湾青年独立連盟広報部、昭和 44 年 6 月 10 日刊）1、2 頁、猿渡新作「台湾研究の現状」『現代史資料（21）台湾 I』（みすず書房、昭和 46 年 3 月 25 日刊）月報 2 頁等参照。

<sup>21</sup> 戴國輝（当時中國文化大學歴史研究所教授）「探索《台湾警察沿革誌》有感《台湾抗日運動史》中譯本出版代序」『海峡評論』第 117 期（2000 年 9 月号）（平成 23 年 6 月 11 日追加）

<http://www.haixiainfo.com.tw/SRM/117-3825.html> ⇒

<http://www.haixiainfo.com.tw/117-3825.html>（平成 26 年 9 月 9 日現在）

<sup>22</sup> 後掲「村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて—（改訂稿）—日本統治下台湾警察史の一齣—」参照。（令和 4（2022）年 1 月 30 日追加）

<sup>23</sup> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayashimitsumasa.pdf>（平成 23 年 6 月 11 日追加）

きいことが判明し、従来殆ど言及されずに来た村上、小林についても、その功績を再評価しておく必要がある。

加えて、特に村上の生涯については、幸いにも、平成 13 (2001) 年春に御令息の村上収氏 (1924~2017) と連絡がとれ、親しく御教示を受ける機会を得た。その詳細は、『台湾協会報』第 557 号 (平成 13 年 2 月)、第 563 号 (同年 8 月)、第 564 号 (同年 9 月)、『著作集』別巻 443 頁以下に収録してある<sup>24</sup>が、村上、小林の上司であった当時の督府警務局保安課事務官 (警務官、所謂思想事務官) についても言及すべきことを付記しておく<sup>25</sup>。

## 6 おわりに

日本統治下台湾警察史については、上記『沿革誌』、『著作集』の他に、督府警務局編『台湾の警察』(年報式、現存は大正 10、15、昭和 6、7、10 年版の 5 ヶ年分か。)等が刊行されているものの、惜しまれるのは、その歴史はまだ十年程残っていたということである。『沿革誌』の記述も、一部を除き、昭和 7 (1932) 年段階 (Ⅲは昭和 10 年頃まで。)に止どまる。近藤正己氏 (1949~) 『総力戦と台湾日本植民地崩壊の研究』(刀水書房、平成 8 年 9 月 10 日刊)等は、その間隙を埋める貴重な研究であり、また、近年当時の公文書類の研究も極めて盛んになりつつあるが、今後更にこの時期を対象とした研究の進展が期待される<sup>26</sup>。

---

<sup>24</sup> 村上については、更に前掲『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書 (続)・雑誌所収著作補遺 (続)・索引』跋 311 頁参照。(平成 26 年 9 月 9 日追加)なお、別稿「村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況 中巻—台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて—(初稿)—日本統治下台湾警察史の一齣—」(<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/murakami001.pdf>)参照。(令和 4 (2022) 年 1 月 25 日追加)

<sup>25</sup> 小林松三郎については、その後、『台湾協会報』に、「小林松三郎氏について—『台湾総督府警察沿革誌』Ⅲ「輯録」者の一人—(前・後)」(『台湾協会報』第 613、614 号 (平成 17 年 10 月 15 日、11 月 15 日))を掲載した(前掲『鷺巣敦哉とその時代 (続々輯) —日本統治下台湾警察史雑纂第六輯—』(自己出版、平成 18 (2006) 年 1 月 1 日刊) 36 頁以下に収録。)。また、督府警務局保安課事務官のことについては、上記村上収氏の聞き書きを補訂の上収録した前掲『鷺巣敦哉著作集』別巻 (緑蔭書房、平成 14 年 1 月 31 日刊) に、併せ当時までに知り得たことを記載しておいた。なお、小林、村上両氏とも、戦時中、南方で陸軍司政官として活動されているが、この時の経歴については、秦郁彦 (1932~) 編『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』(南方軍政史研究フォーラム、平成 10 年 12 月 5 日刊) 参照 (小林: 153 頁、村上: 244 頁) (この部分: 平成 21 年 1 月 14 日追加)

<sup>26</sup> もとより、この時期の『台湾警察時報』の検討も重要である。『台湾警察協会雑誌』及び『台湾警察時報』の全体内容については、中島利郎・林原文子編『『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』総目録』(緑蔭書房、平成 10 年 8 月 25 日刊) 参照。両誌は、一時期台湾で復刻されるといわれたが、最終的には、国立中央図書館台湾分館 (現国立台湾図書館) 所蔵本を基に、マイクロ資料「『台湾警察協会雑誌』第 1 号~第 149 号 (大正 6 年~昭和 4 年)、『台湾警察時報』第 1 号 (通巻第 150 号) ~第 335 号 (昭和 5 年~昭和 18 年。昭和 5 年より『台湾警察時報』に改名。欠号、第 326~328 号) 28 リール 16mm 国立中央図書館台湾分館員工消費合作社 2002 (平成 14) 年刊 (日本代理店) 雄松堂」として刊行された。(平成 20 年 2 月 18 日追加。平成 23 年 6 月 11 日下記アドレス追加)

なお、本平成 17 (2005) 年 1 月 3 日に、台湾財界の重鎮である辜振甫氏 (1917~2005) が逝去された<sup>27</sup>。氏の尊父は有名な辜頭榮 (1866~1937)<sup>28</sup>であり、日本統治期台湾史研究は一日も早く進められなければならない段階に立ち至っているといわざるを得ない。

(平成 17 年 1 月 8 日初稿、平成 26 年 12 月 1 日七訂稿作成)

(附記)

本平成 17 (2005) 年 1 月 12 日、『日本統治下における台湾民族運動史』(中央経済研究所、昭和 62 年 7 月 31 日刊)の著者で、当該時期台湾史研究の先駆者ともいべき國學院大學法学部元教授向山寛夫博士 (1914~2005) が永逝された。享年 90。謹んで御冥福をお祈りするものである(『台湾協会報』第 605 号(平成 17 年 2 月 15 日)参照。)<sup>29</sup>。

なお、今後の課題としては、台湾警察の実務分析として、『台湾地方警察実務要論』(台湾総督府警察官及司獄官練習所無名会出版部、初版:昭和 3 年 9 月 30 日刊、改訂第三版:昭和 9 年 11 月 20 日刊)<sup>30</sup>等の検討がある。

(参考 1) 鷺巣敦哉関係文献追加 (令和 4 (2022) 年 1 月 29 日追加)

・蔡慧玉氏 (台湾 中央研究院台湾史研究所) 「鷺巣敦哉の植民地世界—《警察生活の打明け物語》を中心として—」(国際日本文化研究センター「植民地帝国日本における支配と地域社会」中の報告(平成21(2009)年11月21日))

〈<http://www.nichibun.ac.jp/research/team/tiiki.html>〉

〈<http://www.nichibun.ac.jp/research/faculty/staff3/tsai.html>〉

・鍾淑敏氏 (中央研究院臺灣史研究所副研究員兼副所長) 「臺灣人物誌 臺灣警察界第一寫手 鷺巣敦哉」

〈<https://www.ntl.edu.tw/public/Attachment/57141435512.pdf>〉

---

〈[http://www.koryu.or.jp/center/ez3\\_contents.nsf/08/6086AE042DAC1989492571BC00338104?OpenDocument](http://www.koryu.or.jp/center/ez3_contents.nsf/08/6086AE042DAC1989492571BC00338104?OpenDocument)〉

<sup>27</sup> 邦文では、例えば「辜振甫・海基会理事長が逝去」『台北週報』第 2174 号 (2005 年 1 月 20 日刊)、「日台・中台支えた企業家」『朝日新聞』平成 17 年 2 月 7 日夕刊第 8 面参照。その後、台北で『勁寒梅香:辜振甫人生紀実』(聯経出版、2005 年 1 月刊)が刊行されている。

<sup>28</sup> 辜頭榮翁伝記編纂会編『辜頭榮翁伝』(辜頭榮翁伝記編纂会、昭和 14 年刊)参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BE%9C%E9%A1%95%E6%A0%84>〉、

〈<http://www.bk1.jp/product/03021445?icid=T>〉(アドレスのみ平成 23 年 6 月 11 日追加)

<sup>29</sup> 前掲『鷺巣敦哉とその時代(続々輯)—日本統治下台湾警察史雑纂第六輯—』(自己出版、平成 18(2006)年 1 月 1 日刊)中の「IV 10 向山寛夫先生の御逝去を悼みて」(65 頁以下)参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/mukouyama.pdf>〉(アドレスのみ平成 23 年 6 月 11 日追加)

⇒本 HP 別稿「向山寛夫先生と台湾史研究—日本統治下台湾警察史研究の一齣—」

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/mukouyama.pdf>〉参照。(⇒以下平成 26 年 9 月 9 日追加)

<sup>30</sup> 国立公文書館デジタルアーカイブ 〈<http://www.digital.archives.go.jp/>〉参照。(平成 23 年 6 月 11 日追加)

〈[https://www.ith.sinica.edu.tw/members\\_faculty\\_look.php?l=c&no=3&id=59&page=1&ps=20](https://www.ith.sinica.edu.tw/members_faculty_look.php?l=c&no=3&id=59&page=1&ps=20)〉

・警察政策学会警察史研究部会編「鷺巣敦哉及び植木鬼仏両氏の個人写真について—『警察講習所第十三期卒業記念』アルバムから—」警察政策学会警察史研究部会編『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—（第二輯）—武藤誠氏・加藤晶氏・福永英男氏・戸高公德氏追悼記念論集—【上冊】』（警察政策学会資料第114号、令和3（2021）年5月8日刊。同学会HP 〈<http://www.asss.jp/>〉にアップ済。）255～256頁

（参考2）（令和4（2022）年4月1日追加）

村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況  
中巻—台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて—（改訂稿）  
—日本統治下台湾警察史の一齣—

HP 初出：平成29（2017）年8月20日（日）初稿作成  
令和4（2022）年4月1日（金）改訂稿作成  
（レイアウトを全面変更）

台湾協会会員村上収氏（おさむ、1924～2017）には平成29（2017）年5月20日長逝された。享年93。寔に痛惜の念に堪えない。御生前に賜った御厚情に深甚の謝意を表するとともに、謹んで御冥福をお祈りいたすものである。同氏の厳父は日本統治下台湾史研究上の貴重史料といわれる台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況 中巻—台湾社会運動史—』（同、昭和14年7月28日刊）の実質的著者である村上克夫氏（よしを、1899～1974）であるが、同氏が長く不明であった同書の編纂過程の詳細について明らかにされたことは忘れてはならないことである。これに関しては、以前にも言及したことがある<sup>31</sup>が、今改めてその一端を記し、御功績を紹介しておきたいと思う。

周知のように、有名な台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』（既刊全五巻、戦後緑蔭書房より復刻本あり。本稿末尾【参考】参照。）の編者は同局嘱託であった鷺巣敦哉氏（わしすあつや、1896～1942）<sup>32</sup>であるが、うち最も重要な上記第二編中巻については、同書巻頭の凡例に「[督府警務局保安課] 属村上克夫、小林松三郎輯録、警察沿革誌編纂事務嘱託鷺巣敦哉修校正其他を担任せり。」とだけあって、鷺巣氏とこの二人の属の果たした役割については、久しく不明のままであった。

しかるに、これに関して、中島利郎教授が平成零年代末頃に『台湾警察時報』を精査し、その後『鷺巣敦哉著作集』V（緑蔭書房、平成12年12月10日刊）に鷺巣敦哉「道聴塗

<sup>31</sup> 本HP別稿「鷺巣敦哉と『台湾総督府警察沿革誌』の編纂について—日本統治下台湾警察史の一齣—」（初稿：平成17（2005）年3月15日作成、（HP初載）：改訂稿：平成19（2007）年8月6日作成、以後逐次補訂中）参照。〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu001.pdf>〉

<sup>32</sup> 鷺巣敦哉につき、本HP別稿「鷺巣敦哉氏著作目録抄—日本統治下台湾警察史の一齣—」（（HP初出）初稿：平成19（2007）年8月15日作成、以後逐次補訂中）参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu002.pdf>〉

説・警察沿革誌第二編本を作る苦しみと楽しみ」(第 270 号、昭和 13 年 5 月刊。V 365 頁以下)及び同「警察界道聴塗説・栄転せし小林光政氏・本島社会運動史」(282 号、昭和 14 年 5 月刊。V 414 頁以下)の両稿を復刻されたことにより、その編纂過程がほぼ判明し、村上克夫氏が直接執筆されたことがわかった。

これを受け、更に詳しい内容を知りたく、『台湾協会報』第 557 号(平成 13 年 2 月 15 日)に「(尋ね人) 村上克夫氏」を掲載していただいたところ、幸いにも村上収氏と電話にまず連絡がとれ、貴重な御教示を頂戴できた。その時、あれだけの著作を残されたお方であるので、戦後にかかなりの回想録を残されたのではないかと思ひ、その旨お尋ねすると、早速探して下さったが、執筆のことすら御家族の誰にも知られないまま令弟宅に保存されているのが判明した。

次いで、村上収氏がそれを携えて上京されたので、お会いし拝見するに当然極めて重要なものであった。そこで、是非とも活字化の御検討をしていただくとともに、厳父の思い出その他を御執筆いただきたい旨お願いした。ただ、残念なことに諸般の事情で御自身では書かれず聞き書きの形であればとのことであったので、そのような形にして、急遽「村上克夫氏について一『警察沿革誌』Ⅲ(台湾社会運動史)の「輯録」者一(前・後)」『台湾協会報』第 563、564 号(平成 13 年 8 月 15 日刊、同 9 月 15 日刊)としてまとめた。

その後、同稿は、上記小林松三郎氏(1896~1980 頃、後に新竹警察署長、陸軍司政官、爪哇で終戦、復員)及び小林、村上両氏の直属上司であった督府警務局保安課事務官(警務官)山本暉氏(すすむ、1896~1965、戦後初代高知市長、弁護士)の件をも追加して補訂の上、『鷺巣敦哉著作集』別巻(緑蔭書房、平成 14 年 1 月 31 日刊)巻末参考資料中 443~448 頁に再録した。

なお、小林松三郎氏については、更に台湾警察時代小林氏の部下で当時新竹警友会会長であった大貫敏之氏(1907~2006)の御懇篤な御示教を得て「小林松三郎氏について一『台湾総督府警察沿革誌』Ⅲ「輯録」者の一人一(前・後)」(『台湾協会報』第 613、614(平成 17 年 10 月 15 日刊、同 11 月 15 日刊))として別途成稿したが、残念ながら小林氏の戦後のことは不明なところが多い。

こうしたことにより、村上克夫氏の業績については、多少なりとも明らかにすることができたが、上記村上克夫の残された回想録そのものについては、村上収氏がその後大変な御努力をされて整理の上自費出版されたとお聞きする。台湾総督府警察のある方面での実務的権威であった同氏の回想録であることから、重要なものであり、ただただ敬服に堪えない次第である。

かくして、村上収氏の御尽力により、『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況 中巻一台湾社会運動史一』の著者である厳父村上克夫氏の御事績が後世に伝えられ、同書編纂過程がかなり究明できたことは、日本統治下台湾史研究上大きな意義があることと思料する。

【参考】『台湾総督府警察沿革誌』の全体構想と刊行状況

・『台湾総督府警察沿革誌』は、昭和 8(1933)年より同 17(1942)年にかけて、台湾総督府警務局編として、次のように刊行された。

- ① 『第一編警察機関の構成』(昭和 8 年 12 月 15 日刊) (緑蔭書房復刻本『沿革誌』Ⅰ。)
- ② 『第二編領台以後の治安状況上巻』 (昭和 13 年 3 月 31 日刊) (同『沿革誌』Ⅱ。)
- ③ 『第二編領台以後の治安状況中巻—台湾社会運動史—』 (昭和 14 年 7 月 28 日刊) (同『沿革誌』Ⅲ。)
- ④ 『第二編領台以後の治安状況下巻—司法警察及犯罪即決の変遷史(刑事警察制度の変革)—』 (昭和 17 年 3 月 29 日刊) (同『沿革誌』Ⅳ。)
- ⑤ 『第三編警務事績編』 (昭和 9 年 12 月 17 日刊) (同『沿革誌』Ⅴ。)
- ⑥ 別編『詔勅・令旨・諭告・訓達類纂』 (昭和 16 年 3 月 31 日刊) (『沿革誌』別篇。  
なお、台湾総督官房文書課『諭告訓達類聚』 (昭和 19 年 3 月 29 日刊) はその続巻になる由。)

この他、⑦『台湾警察遺芳録』(台湾総督府警務局編、昭和 15 年 4 月 1 日刊。『遺芳録』。)があるが、これも『沿革誌』の「外篇」という性格を有する(『鷺巣敦哉著作集』Ⅴ367頁)。

・ただ、『台湾総督府警察沿革誌』の当初構想は、これより大きなものであり、例えば、『沿革誌』Ⅰ「凡例」、鷺巣敦哉『台湾警察四十年史話』(『鷺巣敦哉著作集』Ⅱ)「自序」等は、その全体構想を示しているので、御参照を乞いたい。

【新出警察関係資料紹介】・九州・山口台湾総督府警友会『台湾の思出』第 1 号(明治百年記念)(九州・山口台湾総督府警友会、昭和 43 年 11 月 17 日刊)(木村貞次郎氏(1894~1980)、大澤兼太郎氏(鷺巣敦哉の義兄)等のものあり。第 2 号以降は発行されずか。)

(了)